

筑波大学所蔵板碑について

著者	鈴間 智子
雑誌名	筑波大学先史学・考古学研究
号	24
ページ	101-124
発行年	2013-03
その他のタイトル	Notes on itabi in the collection of the University of Tsukuba
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123555

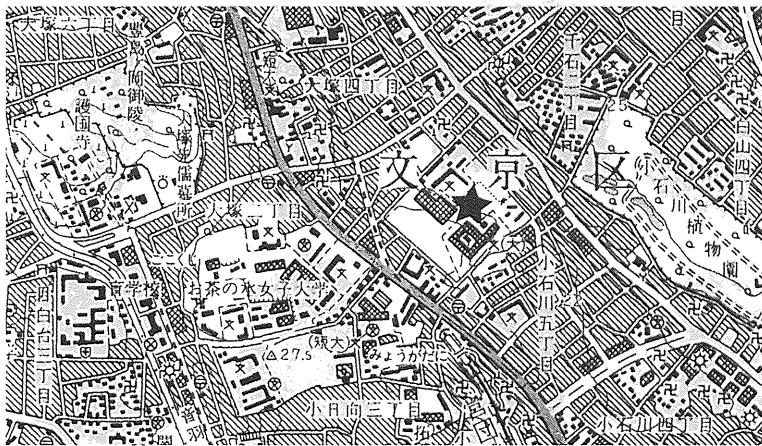
資料紹介

筑波大学所蔵板碑について

鈴 間 智 子

I. はじめに

本稿では筑波大学に所蔵されている13点の武蔵型板碑について資料紹介を行う。なお、筑波大学所蔵板碑群について、文中では板碑群、もしくは資料群と記述する。

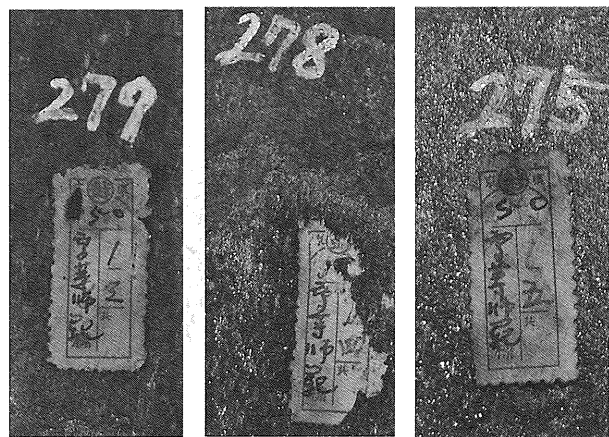


第1図 占春園の位置
(国土地理院発行2万5千分の1地形図より作成)

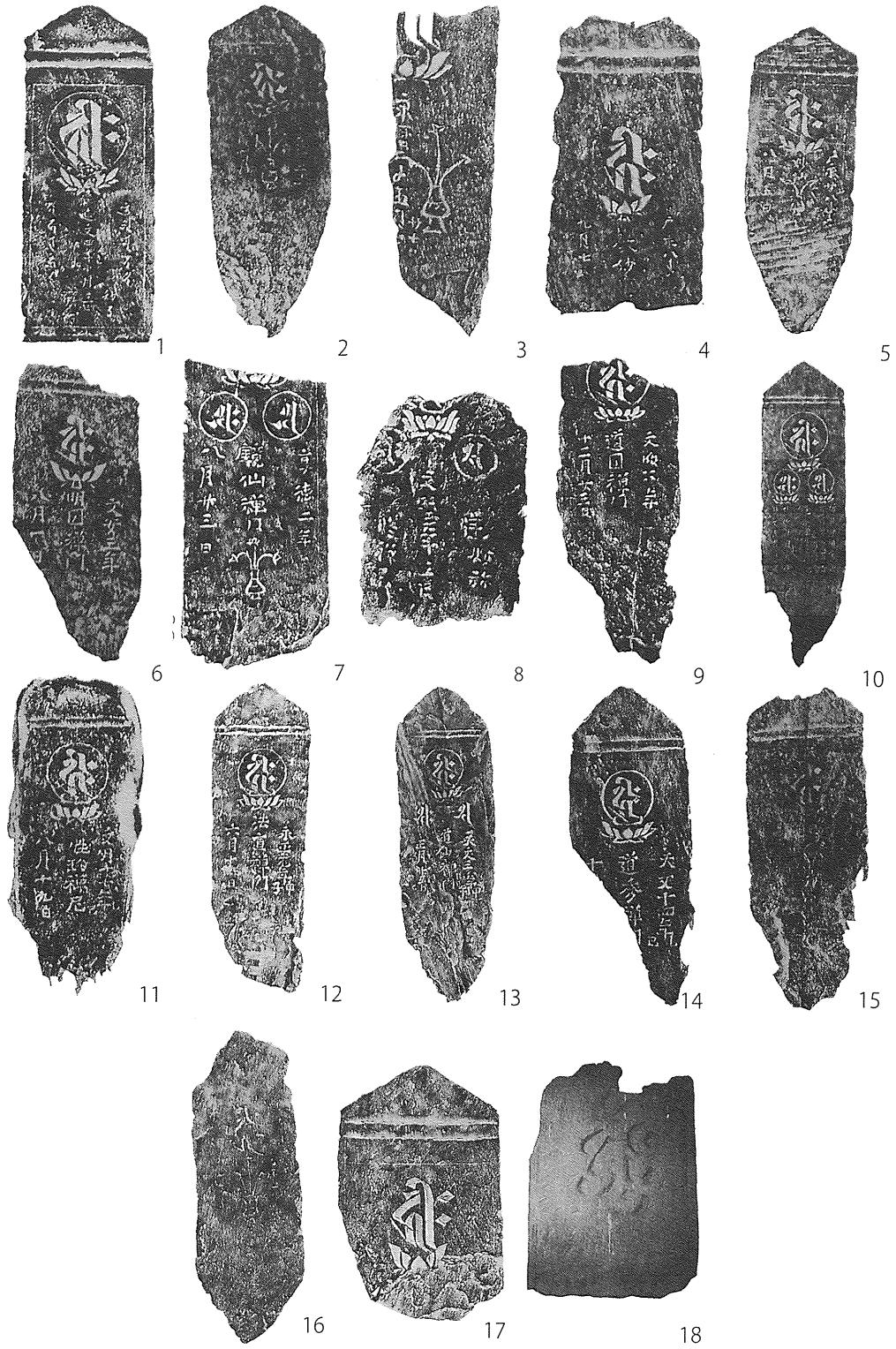
板碑群のうち2点は出土地不明の資料と記録に残されている。出土資料に該当する文明5年(1473)銘阿弥陀三尊種子板碑、年不明阿弥陀種子板碑片1は『文京区史』(荻原・西垣1967)で既に紹介されている資料である(第3図; 第1表)。所蔵は東

京教育大学構内とされており、詳しい場所の記述はない。また『東京都板碑所在目録』(千々和1979)では所在が「東京教育大学元松平氏庭園」となっている(第2表)。そこから推測するに、占春園(第1図)周辺部を工事した際出土した板碑の可能性が高い。出土地、所蔵の経緯が不明瞭となったのは非常に惜しまれる。

残りの11点の板碑群は東京都文



第2図 高等師範学校時代の付箋



第3図 文京区史掲載板碑（荻原・西垣 1967 より転載）番号は第1表に対応

第1表 文京区内板碑一覧(1)

区史編纂時 区内に現存	年代	種子	縦 (単位cm)	横 (単位cm)	所在	備考	表中の 番号	二〇二二年時点 で大学に所蔵
○	弘安一〇(一七八七)	弥陀三尊	六〇以上	二三	光円寺境内(「集古一滴」等) 同前		1	○
○	延文四(一三五九)	弥陀一尊・弥陀心呪 (梵字三字ありと)	四三	一五	牛天神境内(「南向茶話」) 教育大学構内	上部・左半分欠失	2	○
○	永和五(一三七九)	弥陀一尊	四四	一四	同前		3	○
○	康暦二(一三八〇)	不明	四一	二一	牛天神境内(「南向茶話」) 教育大学構内		4	○
○	明徳二(一三九一)	弥陀一尊	四一	一一	一行院(「御府内備考」) 教育大学構内		5	○
○	応永八(一四〇一)	不明	四一	一五	洞雲寺境内(「散步漫遊」) 教育大学構内	上部・下端欠失	6	○
○	応永九(一四〇二)	弥陀一尊	三六	一六	同前		7	○
○	永享二(一四二二)	弥陀一尊	四〇	一九	竜雲院境内 教育大学構内	上部欠失	8	○
○	享徳二(一四五三)	弥陀三尊	二五以上	一八	同前		9	○
○	文明三(一四七二)	弥陀一尊	三五	一五	洞雲寺境内(「散步漫遊」) 同前		10	○
○	〃四(一四七三)	弥陀三尊・光明真言	八三	二三	宗慶寺境内 一行院(「散步漫遊」)	上部欠失	11	○
○	〃一〇(一四七八)	弥陀一尊	四五	一七	教育大学構内		12	○
○	延徳四(一四九二)	不明	四七	一八	同前		13	○
○	〃一七(一四八五)	弥陀一尊	五七	一八	同前		14	○
○	〃一〇(一四五〇)	弥陀三尊	四七	一五	同前		15	○
○	〃六(一五〇九)	弥陀一尊	五二	三一	〔丸山由緒記〕 日輪寺	上部・下端欠失	16	○
○	〃一四(一五三四)	(供養塔とあり)	五〇	二〇	宗慶寺(「散步漫録」) 念速寺境内(「社書」)		16?	○
○	〃二(一五五九)	申待供養二十一仏種子 上欠「阿弥陀仏」とあり	四〇	一五	教育大学構内	(年月アルガ確ナラス)	17	○
○	〃四(一五七三)	弥陀三尊	三一	二〇	同前	(上部ノミ、種子鮮明)	18	○
○	年月日不明	胎藏界大日	二七	一八	小石川植物園内	(上部ノミ、種子風化ス)		
○	年不祥	破片	三	二	同前			

『文京区史』(荻原・西垣一九六七)より一覧表を再編

※ 16はどちらが該当するか不明

第2表 文京区内板碑一覧 (2)

西暦	年号	年	月	日	主尊	偈文 真言 造立趣旨 人名など	形態		備考	所在	所蔵者	同一所 番号	区市町 内番号	二〇一二年時点 で本学に所蔵
							高	幅						
一三五五	文和四	十二	十二	廿三	弥陀	道円禪門	三七	一五	上欠	大塚一、 五、二二、二	東京教育大学 元松平氏庭園	1	1	
一三七九	永和五	□			〃	〃	四二	〃	〃	〃	〃	2	2	
一三八〇	康暦二	五		廿七	〃	〃	四五	一四	上下左欠	二花瓶 花瓶	〃	3	3	
一四〇一	応永八	九		廿七	〃	教妙	五二	一九	略完	二花瓶 枠線	〃	4	4	○
一四一三	応永? 廿	四			〃	〃	四二	一五	完	一花瓶、横細線数條、 枠線	〃	5	5	
一四二一	応永廿八	八		五	〃	妙仙	四二	一五	完	〃	〃	6	6	○
一四四六	文安三	八		一	〃	明円禪門	四二	二七	上下欠	〃	〃	7	7	○
一四五三	享徳二	八		廿三	〃	鏡仙禪門	三八	一九	上下欠	一花瓶 枠線	〃	8	8	○
一四七三	文明五	九		一六	〃	鏡善禪門	八〇	二三	略完	关巳	〃	9	9	○
一五〇四	永正元	六		十	弥陀	法宣禪門	四八	一五	〃	甲午 枠線	〃	10	10	○
一五三四	天文三	五		一五	弥陀三尊	道仙禪門	五六	一七	完	乙巳	〃	11	11	○
一五四五	天文十四	十		廿九	〃	道秀禪門	四〇	一六	下欠	文字に金泥のあと 首部のみ	〃	12	12	
一五七八	天正六	九			〃	道寛禪門	五〇	一八	上欠	戊寅	〃	13	13	
不明	欠				〃	〃	二七	一八	〃	〃	〃	14	14	
一四四二	嘉吉二	三		四	〃	雀善禪尼	四〇	一七	略欠	朝霞市堂山出土	本郷	1	15	
一四八五	文明十七天	二		八	〃	道海禪門?	四五	一四	完	乙巳	東京大学 史料編纂所	2	16	
一三五九	延文四	十		三	〃	弥陀心呪	六〇	二三	完	枠線	光円寺	3	17	
一四八五	文明十七	八		一九	〃	性珍禪尼	八三	二三	略完	〃	宗慶寺	1	18	
一五七三	元龜四	二		吉日	胎藏界大日	申待供養	五二	三一	上下欠	关酉 枠線	日輪寺	1	19	
不明	欠				〃	〃	二七	一八	上部のみ	〃	植物園	1	20	

『東京都板碑所在目録』(千々和一九七九)より表を再編

範学校」時代であれば明治 36～昭和 4 年（1903～1929）、「東京文科大学付属東京高等師範学校」時代であれば昭和 4～27 年（1929～52）の間に所蔵したことになる。遺物に残されている付箋の台帳が失われていることもあり、どの時期が該当するのかは判然としない。

しかし資料の所蔵に関しては以下のような経緯が言い伝えられていることから、「東京高等師範」時代以降に大学の資料として搬入されたと考えるのが適切と思われる。

まず本資料の歴史的価値に注目されたのは東京文科大学初代学長である三宅米吉教授であったと伝えられている。次に東京教育大学教授であった木代修一教授が資料の散逸防止を目的とし、占春園内に造立していた板碑を大学内に保護した⁴⁾。そして本資料群は東京教育大学の移転に伴い筑波大学に移管され、現在、先史学考古学研究室が管理するに至ったという。

次に三宅米吉教授と木代修一教授との東京師範学校、東京文科大学、東京教育大学との関わりについて述べたい。

三宅米吉氏は明治 23 年（1889）より高等師範学校の歴史の講義を嘱託され、明治 29 年（1895）教授に任ぜられた。そしてさらに大正 9～昭和 4 年（1920～1929）にかけて第 10 代東京高等師範学校校長に、昭和 4 年に東京文科大学初代学長に就任した（鈴木 1978）。

また木代修一氏は大正 11 年（1922）に東京高等師範学校文科第一部別組に進学し、大正 15 年（1926）に卒業した。そして昭和 4 年（1929）に東京文科大学の助手に任じられ、三宅米吉教授のもとで国史学および東洋史学（兼）教室に勤務し、研究室創設の実務に携わっている。その後、昭和 7 年（1932）に東京高等師範学校の助教授に、昭和 13 年（1938）に東京高等師範学校教授に、昭和 26 年（1951）に東京教育大学教授並びに東京高等師範学校教授となり、昭和 36 年（1961）に東京教育大学教授を退官している（木代修一教授出版記念会 1961）。

このことと前述した経緯を考え合わせると、本資料の所蔵時期は木代修一教授が高等師範学校に在籍していた大正 11 年以降が適当であると考えられる。

ところで板碑群が文京区に造立していたことは先に説明した通りであるが、区内に所在する板碑の大部分は筑波大学が所蔵している。例えば『文京区史』（荻原・西垣 1967）によると 30 点が文京区内板碑として報告されているが、そのなかで 20 点現存していることが明言されている（第 1 表）。このうち 15 点は東京教育大学所蔵である。ところが『東京都板碑所在目録』（千々和 1979）では文京区の板碑は 20 点と報告され、14 点が東京教育大学元松平氏庭園の所蔵とされており（第 2 表）、『文京のあゆみ』（戸畑 1990）では 15 点の板碑が報告され、9 点が筑波大学歴史・人類学系所蔵とされている（第 3 表）。

いずれにしてもそれぞれに紹介されている資料の数に異同があり、筑波大学所蔵板碑の全貌に関しては不明である。

本稿では現時点で筑波大学が所蔵している全板碑 13 点についての資料報告を行う。そして筑波大学所蔵板碑を含めた文京区の板碑の学問的位置づけを、生産・流通システムを援用し試みる。

Ⅱ. 板碑について

本章では、板碑の観察によって得られた数値情報や板碑の状態について報告をする。計測数値の一覧は第4表、拓本は第4～16図を参照願いたい。なお本章では説明文中で便宜上、向かって右側にあたる位置を右、向かって左にあたる位置を左と記す。

また本稿における計測値は、次のように定義づけた。

- ・高さは頂端部から基端部までの最大値
- ・上幅、上厚は二条線下部の最大値
- ・下幅、下厚は塔身部下部の最大値

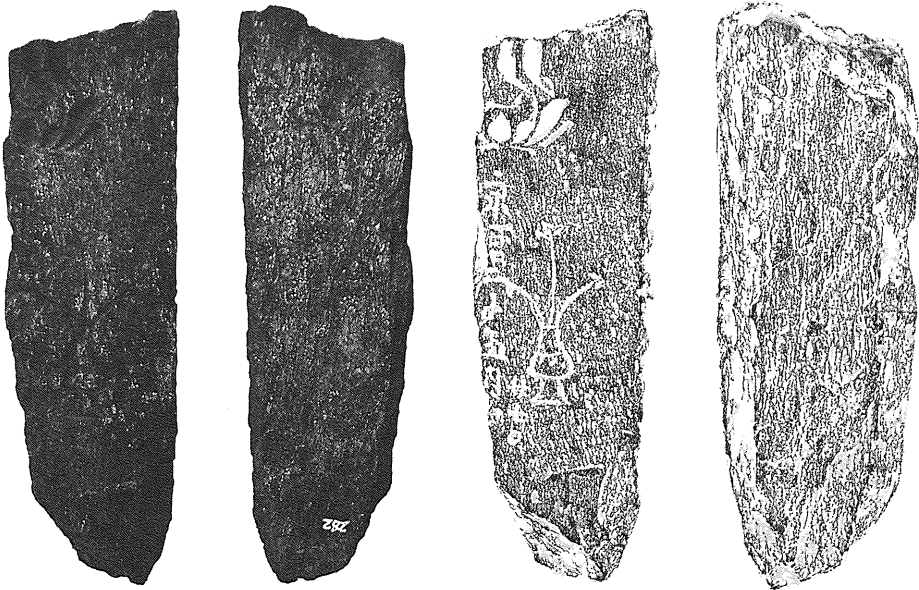
破損品に関しては、高さ、幅、厚さそれぞれの最大値を記した。但し二条線部分が残る場合は上幅と最大幅を併記した。

康暦2年（1380）銘阿弥陀一尊種子板碑（第4図・第4表）

・『文京区史』『東京都板碑所在目録』『文京のあゆみ』に掲載

緑泥石片岩製⁵⁾。高さ45.5cm、幅13.4cm、厚さ2.5cm。板碑の右下方部のみ現存している。蓮座の上部に主尊種子正体キリークがのる。蓮座下部の中央に康暦二年五月、右側にはみ出しで廿七日と刻まれている。日付の右隣には花瓶が彫られている。なお伊藤宏之は花瓶が左右一対で刻まれていた可能性を指摘している（伊藤2011a）。

裏面には特に目立った押し削り痕などの調整は確認できない。



S=1/6

第4図 康暦2年（1380）銘阿弥陀一尊種子板碑



S=1/8

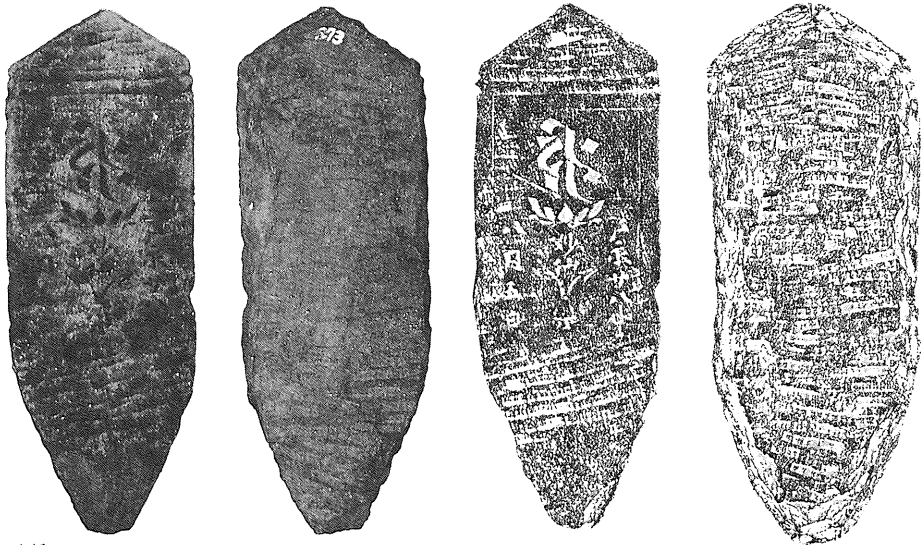
第5図 応永8年(1402)銘阿弥陀一尊種子板碑

応永8年(1401)銘阿弥陀一尊種子板碑(第5図・第4表)

・『文京区史』『東京都板碑所在目録』『文京区のあゆみ』に掲載

緑泥石片岩製。高さ43.1cm, 上幅21.0cm(最大幅は22.4cm), 厚さ2.8cm。頂部が破損し, 下部は大きく欠損している。浅草寺型蓮座(第20図)の上部に主尊種子異体キリークがのる。被供養者は教妙, 蓮座下部の中央に配置されている。被供養者名の右側に応永八年, 左側に九月七日と刻まれている。二条線部分に羽刻みと思われる加工痕が残り, 彫りは非常に浅いが割付線が確認できる。

裏面には押し削り痕が残る。ノミの幅は0.7~0.8cmで, 右半分側に集中する。左右両端部に成形調整を行った痕跡がみられる。



S=1/6

第6図 応永28年(1421)銘阿弥陀一尊種子板碑

応永 28 年（1421）銘阿弥陀一尊種子板碑（第 6 図・第 4 表）

・『文京区史』『東京都板碑所在目録』『文京のあゆみ』に掲載

緑泥石片岩製。高さ 42.0cm，上幅 15.1cm，上厚 2.3cm，下幅 15.0cm，下厚 1.9cm。完形。板碑頭部の角度は 108°。頂部～二条線部および基部に平ノミの押し削り痕が残る。ノミ幅は 0.7～0.8cm である。蓮座の上部に主尊種子異体キリークがのる。被供養者は妙仙，蓮座下部の中央に配置され，その下に花瓶が彫られている。被供養者名の右側に応永廿八年，左側に八月五日と刻まれている。二条線部分に羽刻みの痕跡が残り，割付線が確認できる。

裏面には全面的に押し削り痕が残る。ノミ幅は 0.7cm。左右上端部に成形調整を行った痕跡がみられる。



S=1/6

第 7 図 文安 3 年（1446）銘阿弥陀一尊種子板碑

文安 3 年（1446）銘阿弥陀一尊種子板碑（第 7 図・第 4 表）

・『文京区史』『東京都板碑所在目録』『文京のあゆみ』に掲載

緑泥石片岩製。高さ 37.9cm，上幅 15.8cm，上厚 2.0cm，下幅 15.3cm，下厚 2.1cm。頂部右側および左下部を欠損している。浅草寺型蓮座の上に主尊種子異体キリークがのる。被供養者名は明円禅門，蓮座下部の中央に配置されている。被供養者名の右側に文安三年，左側に八月一日と刻まれている。二条線部分に羽刻みの痕跡が残る。

裏面には全面的に押し削り痕が残る。ノミ幅は 1.0～1.1cm。左右端部に成形調整を行った痕跡がみられる。

享徳 2 年（1453）銘阿弥陀三尊種子板碑（第 8 図・第 4 表）

・『文京区史』『東京都板碑所在目録』『文京のあゆみ』に掲載

緑泥石片岩製。高さ 40.3cm，幅 19.3cm，厚さ 2.8cm。蓮座より上方を欠損している。主尊



S=1/8

第 8 図 享徳 2 年（1453）銘阿弥陀三尊種子板碑

種子正体キリークにのみ蓮座がつく。蓮座の下部にサ、サクが配されており、それらは月輪に囲まれているが蓮座はない。被供養者名は鏡仙禪門、蓮座下部の中央に配置されている。被供養者名の下部に花瓶、右側に享徳二年、左側に八月廿三日と刻まれている。月輪は工具で刻んだ痕跡が観察でき、割付線が残る。

裏面の右側上部と左側下部にごく一部、押し削り痕が残る。ノミ幅は 1.0cm。

文明 5 年（1473）銘阿弥陀三尊種子板碑（第 9 図・第 4 表）

・『文京区史』『東京都板碑所在目録』『文京のあゆみ』に掲載（工事の際出土）

緑泥石片岩製。高さ 88.0cm、上幅 23.2cm、上厚 4.4cm、下幅 22.8cm、下厚 2.9cm。完形。板碑頭部の角度は 103°。正体キリーク、サ、サクが刻まれる。それぞれに蓮座、月輪がつく。被葬者名は鏡善禪門、蓮座下部の中央に配置されている。被供養者名の右側に文明五年⁵、左側に九月十六日が刻まれている。また年号の右側に光明真言 2 行、月日の左側に光明真言 2 行記されている。月輪は工具で刻んだ痕跡が観察でき、月輪内部に中房の表現がみられる。二条線部分に羽刻みの痕跡が残り、彫りは浅いが割付線が観察できる。

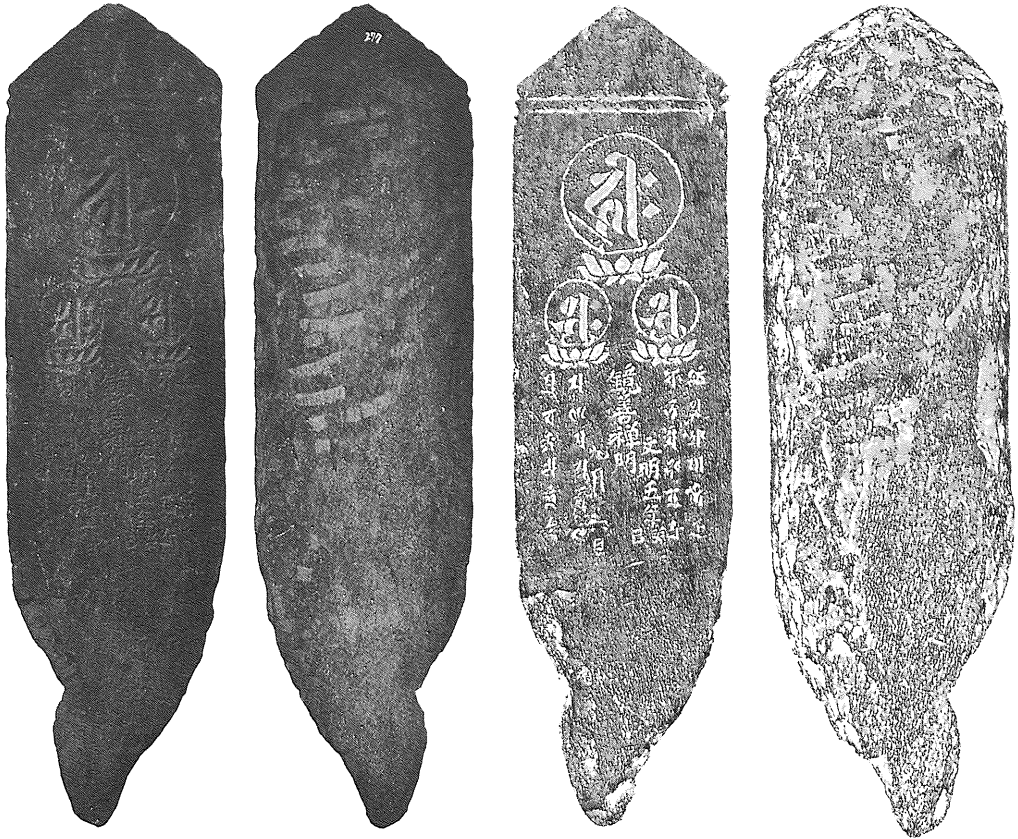
裏面は主に上半分に押し削り痕が残る。ノミ幅は 1.1～1.4cm。

文亀 2 年（1502）銘阿弥陀一尊種子板碑（第 10 図・第 4 表）

・掲載書籍なし（未報告資料）

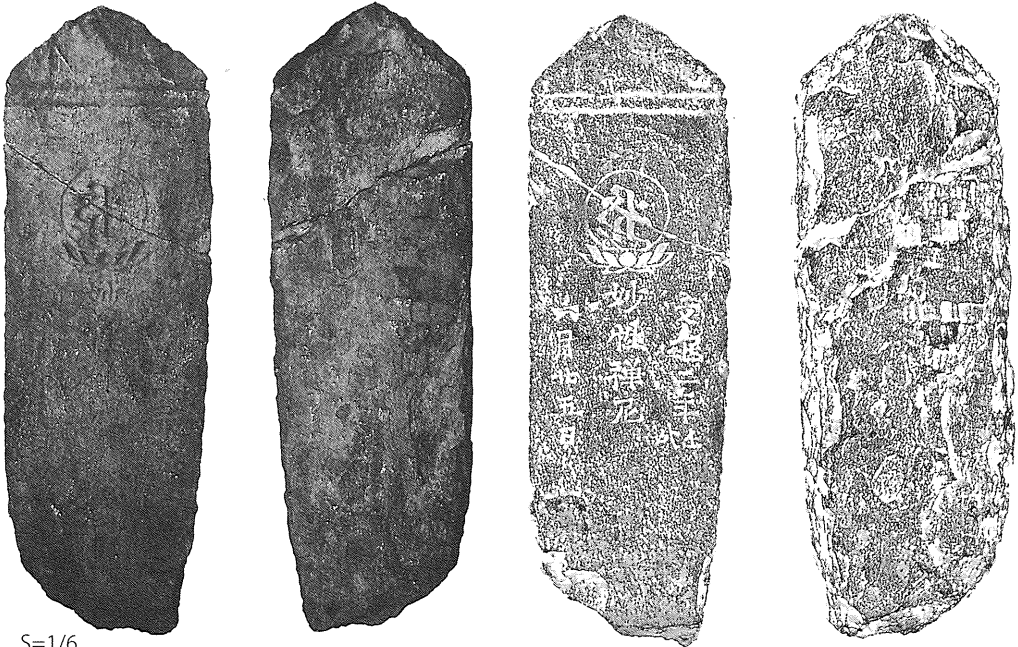
緑泥石片岩製。高さ 50.0cm、上幅 15.8cm、上厚 1.8cm、下幅 15.0cm、下厚 2.5cm。二つに割れているが完形。板碑頭部の角度は 102°。蓮座の上に月輪に囲まれた異体キリークがのる。被供養者名は妙性禪尼、蓮座下部の中央に配置されている。被供養者名の右側に文亀二年²、左側に六月廿五日と刻まれている。月輪は工具で刻んだ痕跡が観察できる。二条線部分に羽刻みの痕跡が残る。

裏面は僅かに押し削り痕が残る。ノミ幅は 1.6cm。



S=1/8

第9図 文明5年(1873) 銘阿弥陀三尊種子板碑



S=1/6

第10図 文亀2年(1871) 銘阿弥陀一尊種子板碑



第 11 図 永正元年（1504）銘阿弥陀一尊種子板碑

永正元（1504）年銘阿弥陀一尊種子板碑（第 11 図・第 4 表）

・『文京区史』『東京都板碑所在目録』『文京のあゆみ』に掲載

緑泥石片岩製。高さ 48.3cm，上幅 15.6cm，上厚 2.0cm，下幅 14.4cm，下厚 1.8cm。完形。板碑頭部の角度は 101°。蓮座の上に月輪に囲まれた異体キリークがのる。被葬者名は法宣禅門，蓮座下部の中央に配置されている。名前の右側に永正元年^年，左側に六月十日が刻まれている。月輪を工具で刻んだ痕跡が観察できる。彫りは浅いが割付線が確認できる。基部にノミ痕がある。ノミ幅は 1.2cm。

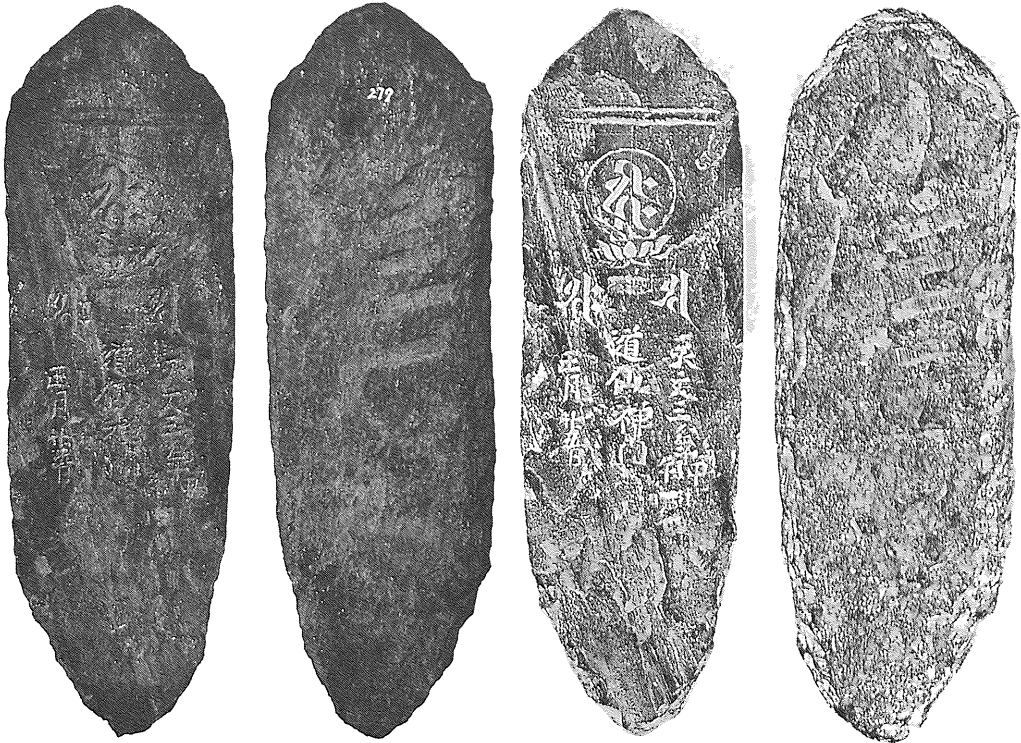
裏面は基部以外に押し削り痕が残る。ノミ幅は 1.4cm。

天文 3（1534）年銘阿弥陀三尊種子板碑（第 12 図・第 4 表・（口絵））

・『文京区史』『東京都板碑所在目録』『文京のあゆみ』に掲載

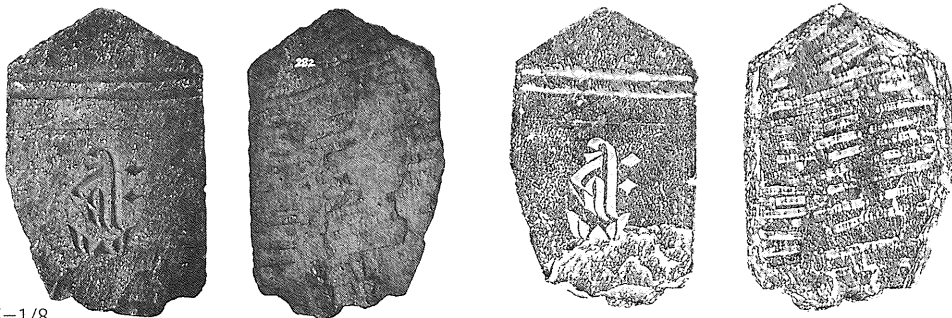
緑泥石片岩製。高さ 58.0cm，上幅 17.5cm，上厚 2.8cm，下幅 17.2cm，下厚 2.6cm。完形。板碑頭部の角度は 98°。蓮座の上に月輪に囲まれた異体キリークがのる。蓮座の下にサ，サクが配されており，それらには月輪，蓮座ともない。被供養者名の名前は道仙禅門，蓮座下部の中央に配置されている。被供養者名の右側に天文三年^年，左側に正月十五日が刻まれている。月輪は工具で刻んだ痕跡が観察できる。二条線部分に羽刻みの痕跡が残り，割付線がはっきりと確認できる。紀年銘の「五」，被供養者名の「仙」に金箔が，蓮座の一部に漆と思われる物質が残る（野中 1997；朽津 2010；朽津 2011）。

裏面は右半分に押し削り痕が残る。ノミ幅は 1.5cm。



S=1/6

第 12 図 天文 3 年（1534）銘阿弥陀一尊種子板碑



S=1/8

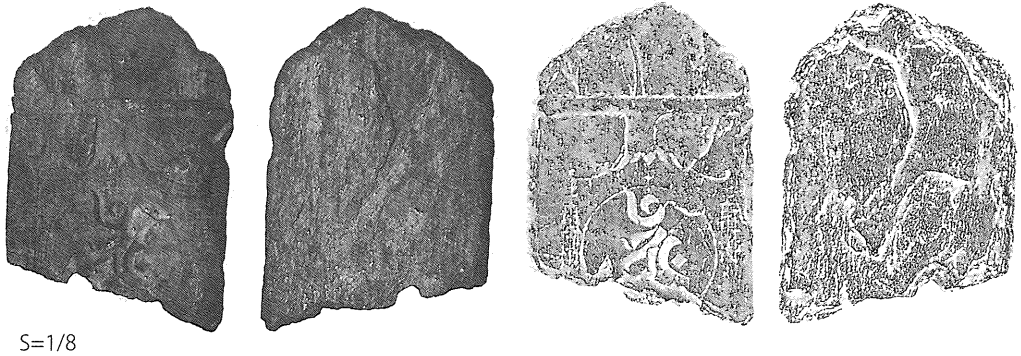
第 13 図 年不明阿弥陀種子板碑片 1

年不明阿弥陀種子板碑片 1（第 13 図・第 4 表）

・『文京区史』に掲載（工事の際出土）

緑泥石片岩製。高さ 32.6cm，幅 20.5cm，厚さ 2.0cm。蓮座より下を欠損している。板碑頭部の角度は 124°。浅草寺型蓮座の上に正体キリークがのる。板碑の左側下部に僅かに脇侍種子の一部がある。二条線部分に羽刻みの痕跡が残り，割付線も確認できる。

裏面は全面的に押し削り痕が残る。ノミ幅は 0.9～1.0cm。左側端部に成形調整を行った痕跡がみられる。



S=1/8

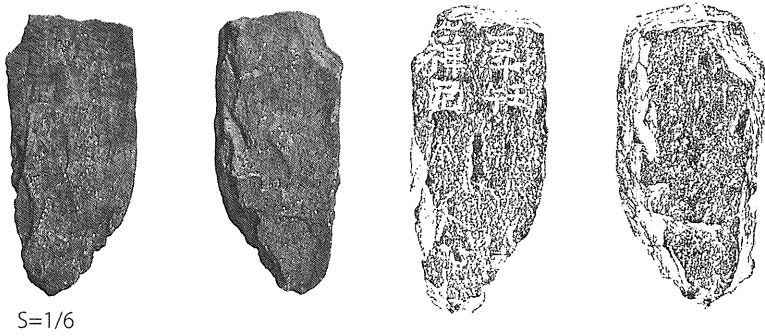
第 14 図 年不明金剛界大日種子板碑片 2

年不明金剛界大日種子板碑片 2 (第 14 図・第 4 表)

・未報告資料

緑泥石片岩製。高さ 34.6cm, 幅 24.0cm, 厚さ 1.6cm。主尊種子より下を欠損している。板碑頭部の角度は 120°。月輪に囲まれたパーンクが刻まれている。種子の上には天蓋と三条の瓔珞が彫られ、伊藤宏之はこの天蓋の型式が埼玉県東南部から東京都 23 区に見られる事を指摘している (伊藤 2011a)。

裏面には押し削り痕などの調整痕はない。



S=1/6

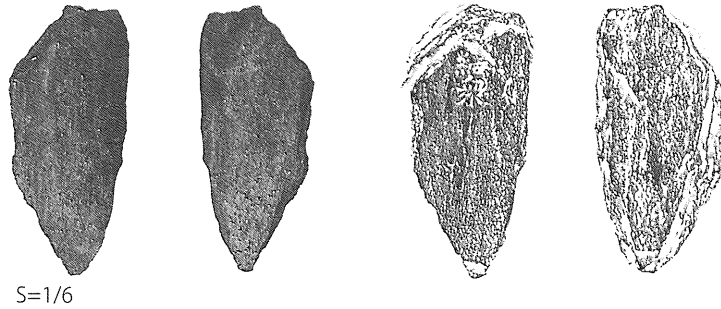
第 15 図 年不明板碑片 3

年不明板碑片 3 (第 15 図・第 4 表)

・未報告資料

緑泥石片岩製。高さ 22.4cm, 幅 10.4cm, 厚さ 1.9cm。板碑の右側下部の一部と推定できる破片。右側に年肆, 左側に禪尼と刻まれている。「壬午」年に該当する可能性がある年号は寛正 3 (1462) 年, 大永 2 (1522) 年, 天正 10 (1582) 年である。寛正 3 年, 大永 2 年のいずれかが該当すると推測される。伊藤宏之は年数の残画から大永 2 年と推定している (伊藤 2011a)。

裏面には押し削り痕などの調整痕はない。



第 16 図 年不明板碑片 4

年不明板碑片 4 (第 16 図・第 4 表)

緑泥石片岩製。高さ 21.0cm, 幅 9.1cm, 厚さ 1.9cm。結衆と刻まれている。結衆の板碑の一部と推定される。伊藤宏之は 15 世紀半ばから 16 世紀半ばごろの資料と推定している (伊藤 2011a)。

裏面には押し削り痕などの調整痕はない。

以上 13 点の板碑を筑波大学は所蔵している。さらにこれら以外に東京教育大学所蔵として『文京区史』に以下の板碑が報告されている。

- ・ 永和 5 年 (1379) 銘阿弥陀一尊種子板碑
- ・ 文明 4 年 (1472) 銘阿弥陀一尊種子板碑
- ・ 永正 6 年 (1509) 銘阿弥陀一尊種子板碑
- ・ 天文 14 年 (1545) 銘阿弥陀一尊種子板碑
- ・ 年不祥板碑 2 点

『東京都板碑所蔵目録』では以下のとおりである。

- ・ 文和 4 年 (1355) 銘阿弥陀一尊種子板碑
- ・ 永和 5 年 (1379) 銘阿弥陀一尊種子板碑
- ・ 応永 20 年 (1413) 銘阿弥陀一尊種子板碑
- ・ 天文 14 年 (1545) 銘阿弥陀一尊種子板碑
- ・ 天正 6 年 (1578) 銘阿弥陀一尊種子板碑
- ・ (年不明板碑 1 点: 現存板碑で大きさが合う資料がない)

また『文京のあゆみ』では筑波大学所蔵資料として以下が報告されている。

- ・ 文明 4 年 (1472) 銘阿弥陀一尊種子板碑

なお、これらはいずれも筑波大学での所蔵を確認することはできなかった。

第4表 筑波大学所蔵板碑一覽 (2012年時点)

年不明板碑片4 年不明板碑片3 年不明板碑片2 年不明阿弥陀種子板碑片1	西暦	年号	年	干支	月	日	主尊	真言 偽文 造立趣旨 人名など	形態							月輪	花瓶	割付線	押し削り	備考
									板碑頭部の角度	高	幅	上幅	下幅	厚さ	上厚					
年不明阿弥陀種子板碑片1	一三八〇	康暦	二	二	五	廿七	阿弥陀一尊 正体キリク	真言 妙妙	一〇八	四十二・〇	一三・四	二一・〇	一五・〇	二・八	二・五	二・三	二・九	〇・七	〇	裏面に注記番号「282」 最大幅は二十二・四 裏面に注記番号「272」
年不明阿弥陀種子板碑片1	一四〇一	応永	八	八	九	七	阿弥陀一尊 異体キリク	真言 教妙	四十三・一	四十二・〇	一三・四	二一・〇	一五・〇	二・八	二・五	二・三	二・九	〇・七	〇	裏面に注記番号「273」
年不明阿弥陀種子板碑片1	一四二二	応永	廿八	八	八	五	阿弥陀一尊 異体キリク	真言 妙妙	四十二・〇	四十二・〇	一三・四	二一・〇	一五・〇	二・八	二・五	二・三	二・九	〇・七	〇	裏面に注記番号「273」
年不明阿弥陀種子板碑片1	一四四六	文安	三	三	八	一	阿弥陀一尊 異体キリク	真言 明円禪門	三十七・九	三十七・九	一三・四	一五・八	一五・三	二・八	二・五	二・三	二・九	〇・七	〇	裏面に注記番号「274」
年不明阿弥陀種子板碑片1	一四五三	享徳	二	二	八	廿三	阿弥陀三尊 正体キリク サ・サク	真言 鏡仙禪門	四十三	四十三	一三・四	一五・八	一五・三	二・八	二・五	二・三	二・九	〇・七	〇	裏面に注記番号「275」 「5015 高等師範」 付箋
年不明阿弥陀種子板碑片1	一四七三	文明	五	癸巳	九	十六	阿弥陀三尊 正体キリク サ・サク	真言 鏡仙禪門 光明真言	八十八・〇	八十八・〇	一三・四	二一・〇	二一・八	四・四	二・九	二・三	二・九	〇・七	〇	裏面に注記番号「277」 出土資料
年不明阿弥陀種子板碑片1	一五〇二	文龜	二	壬戌	六	廿五	阿弥陀一尊 異体キリク	真言 妙性禪尼	五十・〇	五十・〇	一三・四	一五・八	一五・〇	二・八	二・五	二・三	二・九	〇・七	〇	裏面に注記番号「278」 「5014 高等師範」 付箋
年不明阿弥陀種子板碑片1	一五〇四	永正	元	甲子	六	十	阿弥陀一尊 異体キリク	真言 法宣禪門	四十八・三	四十八・三	一三・四	一五・六	一四・四	二・八	二・五	二・三	二・九	〇・七	〇	裏面に注記番号「279」 付箋
年不明阿弥陀種子板碑片1	一五三四	天文	三	甲午	正	十五	阿弥陀三尊 異体キリク サ・サク	真言 道仙禪門	九八	五十八・〇	一三・四	一七・五	一七・二	二・八	二・五	二・三	二・九	〇・七	〇	裏面に注記番号「280」 「5013 高等師範」 付箋
年不明阿弥陀種子板碑片1	年不明阿弥陀種子板碑片2	金剛界大日	二二〇	三十四	六	二十四	〇	〇	二一・〇	一〇・四	九	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	「結果」と刻まれている
年不明阿弥陀種子板碑片1	年不明阿弥陀種子板碑片2	金剛界大日	二二四	三十二	六	二十	五	〇	二一・〇	一〇・四	九	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	「年壬午」「禪尼」と刻まれている
年不明阿弥陀種子板碑片1	年不明阿弥陀種子板碑片2	金剛界大日	二二〇	三十四	六	二十四	〇	〇	二一・〇	一〇・四	九	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	「結果」と刻まれている

Ⅲ. 板碑の分析

1. 文京区の板碑

板碑は13世紀から製作が開始され、14世紀の南北朝期に製作の最盛期を迎えるとされている。そして14世紀後半から徐々に数が減少し、15世紀に激減した後、17世紀以降中世のような板碑としての利用が途絶えると考えられてきた(千々和1971)。本資料群の製作時期は14世紀後半から16世紀である。つまりほぼ最盛期にあたる時期から衰退期までの板碑が占春園、その周辺地に造立されていたといえる。

ちなみに文京区内で最古の紀年銘を持つ板碑は筑波大学が所蔵している康暦2年(1380)銘板碑である。しかし『文京区史』『文京のあゆみ』によると、江戸時代の『集古一滴』に弥陀三尊が刻まれた弘安10年(1287)銘板碑、弥陀一尊・弥陀心呪と刻まれた延文4年(1359)銘板碑が光円寺境内に、『南向茶話』に延文6年(1361)銘板碑が牛天神境内に造立していたことが記録されている。また近隣の台東区や新宿区などに残されている板碑の年代を調べたところ13世紀・14世紀代の資料を数多く確認できた(千々和1979;伊藤2008)。したがってかつて文京区内においても13世紀・14世紀代の板碑が相当数存在していたと推測される。

但し文京区内は、現在区内で造立する資料4点(戸畑1990)、出土資料4点、筑波大学所蔵資料13点、合わせて計21点しか確認されていない。東京都区内でも板碑の残存率が非常に乏しい地域である。

因みに板碑が出土したのは3箇所である。駒込富士前町遺跡で享徳四年(1455)銘板碑が1点(文京区教育委員会2005)、大塚三丁目遺跡第3地点で無銘板碑が1点(伊藤2010)、大塚遺跡で無銘板碑2点(松井2008)の出土が知られている(第17図)。



- 1. 駒込富士前町遺跡
(文京区教育委員会2005より転載)
- 2・3. 大塚遺跡 (松井2008より転載)
- 4. 大塚三丁目遺跡 第3地点
(伊藤2010より転載)

S=1/3

第17図 文京区内出土板碑

2. 板碑の蓮座

このように数が少ないため文京区内板碑群の生産・流通状況を復元することは非常に難しい。それを踏まえた上で区内板碑の蓮座を型式分類し、倉田恵津子と伊藤宏之の研究成果から流通経路を推測してみたい。

まず蓮座は7種類に分類することができる(第18図)。拓本や実物が実見できなかった板碑については、『文京区史』『文京のあゆみ』に掲載されている拓本や写真を参考とした。なお分類については第5表を参照願いたい。

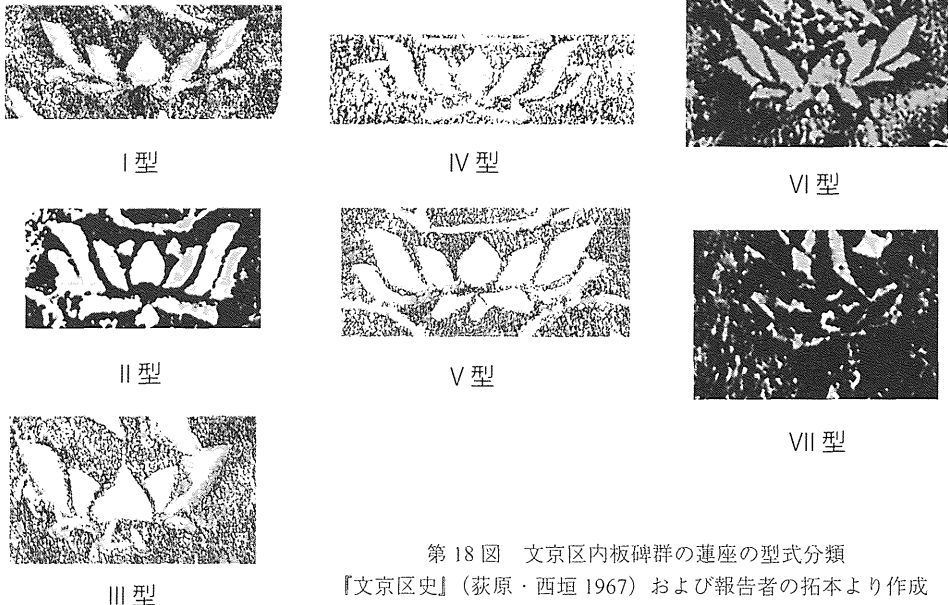
- I型： 反花を2本の線状の葉研彫で表現した蓮座
- II型： 反花を2本の線状の葉研彫で表現し、その間に茎の表現もある蓮座
- III型： 浅草寺型蓮座(第19図を参照)
- IV型： 反花・側弁を線彫し、他は葉研彫された蓮座
- V型： 反花・側弁を含めて全て葉研彫された蓮座
- VI型： 全て葉研彫で、間弁の表現がある蓮座
- VII型： 全て線彫された蓮座

これら以外に、蓮座を持たない日輪寺境内所在元亀4年銘(1573)申待供養二十一仏種子板碑、小石川植物園構内年不明板碑、旧東京教育大学構内所在年不明板碑(『文京区史』参照、現在所在不明)の板碑も分布している。

以上の分析から見出せる特徴は、次のとおりである。

まず区内板碑群では蝶形蓮座や半円形蓮座が全く見られない。文京区内の板碑は府中近辺部と異なった系譜の石工が加工した製品が流通していたと想定できる⁶⁾。

またIV型に分類した板碑がほぼ全て月輪を備える一方で、それ以外の型式を持つ板碑に月輪を備えた例は少ない。このほかに、蓮座とは関連しないが、花瓶の消滅と入れ替わるように月輪が出現する傾向も特徴として挙げられる。これらの違いに意味があるのか、例が少ないため判然としない。



第18図 文京区内板碑群の蓮座の型式分類
『文京区史』(荻原・西垣1967)および報告者の拓本より作成

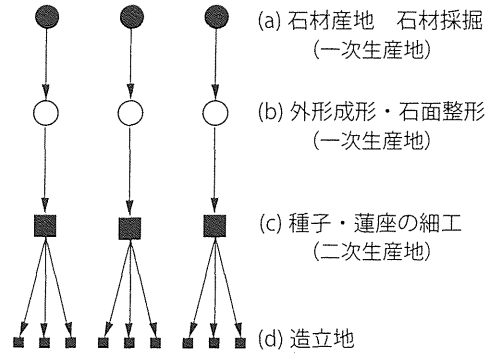
3. 板碑の生産

前述した区内板碑の蓮座の分類結果と伊藤宏之、倉田恵津子の研究成果をふまえ以下のような生産・流通経路を推測することが可能である。

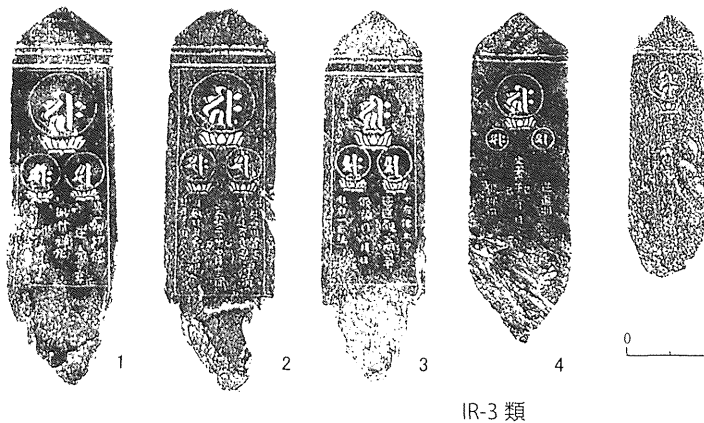
倉田が行った板碑の型式分類（第21・22図）を参考にすると、イルマ川流域⁷⁾で観察される資料（倉田2012内ではIR-3・4・5・6類）と区内板碑に刻まれている蓮座（I・II・IV型）とが酷似していた。また伊藤は区内板碑にも見られる浅草寺型蓮座（III型）の分布域から、この蓮座をもつ板碑が隅田川流域で生産された可能性を指摘した（伊藤2008;伊藤2011b）。さらに葛西城で発掘された享祿3年（1530）銘板碑と永正元年（1504）銘板碑の梵字と蓮座（IV型）が同型式と思われるほど類似していたことも注意しなくてはならない（第23図）。

これらのことから推測するに、倉田が一次生産地⁸⁾として挙げた（倉田2012）アラ川中流長瀨町野上下郷の青石採石遺跡とその周辺地域

（坂詰1990;坂詰1991;渡邊1997;池上2001）もしくはイルマ川支流槻川中流小川町下里および割谷周辺（磯野・伊藤2007）は、区内板碑に使用されている石材の原産地の可能性が高いことが指摘できる。また、二次生産地としては伊藤が述べるように隅田川周辺地域が挙げられよう。なお伊藤は葛西城近くに板碑の生産拠点が存在したことも想定している（伊藤2008）。先に述べたように葛西城から出土した板碑と区内板碑とが非常に類似する点から見て、文京区へも当該地からの搬入がありえたであろう。この点については今後、詳細な検討が必要である。

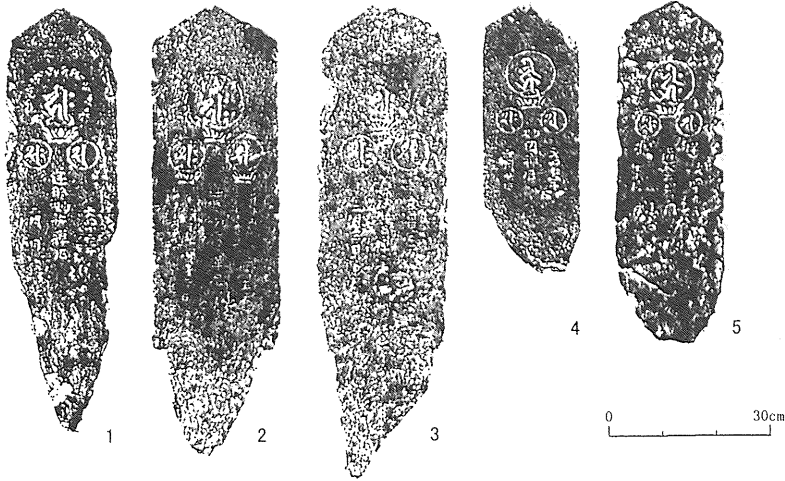


第20図 板碑生産・流通モデル
（倉田2012より転載）



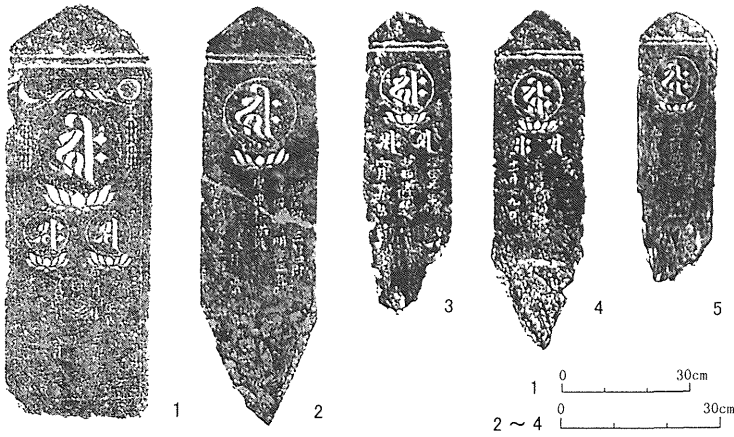
1. 川越市 市立図書館
嘉吉3年(1443)
88×25×2.2
2. 所沢市 中義智家
文安2年(1445)
82×23×3.0
3. 川越市 市立図書館
文安2年(1470)
87×24×2.0
4. 入間市 杉田家墓地
文安6年(1449)
77×23×1.5
5. 入間市 杉田家墓地
寛正6年(1465)
60×18×2.0

第21図 倉田恵津子による板碑の分類(1)（倉田2012より転載）



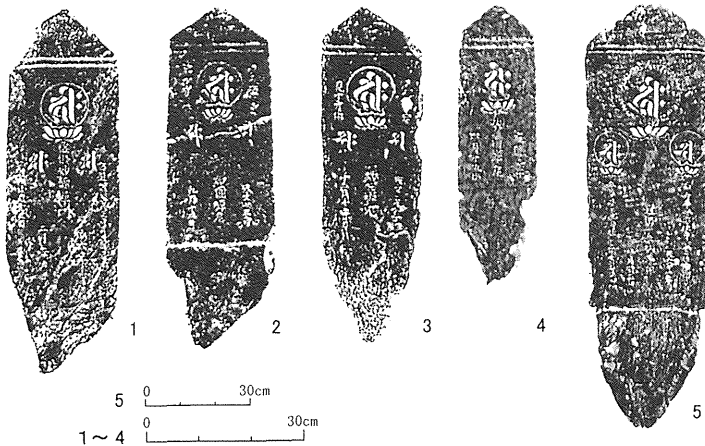
1. 入間市
下藤沢本山靈園
文明 12 年 (1480)
80×21×2.0
2. 飯能市 唐竹共同墓地
明応 5 年 (1496)
85×24×2.6
3. 飯能市 宝蔵寺
文龜 2 年 (1502)
89×23×2.3
4. 入間市 杉田家墓地
文明 4 年 (1472)
51×18×2.2
5. 青梅市 武藤八郎家
文明 19 年 (1487)
65×20

IR-4 類



1. 北区 浮間北向地藏堂
文明 16 年 (1484)
98.2×33.5×2.5
2. 戸田市 平等寺
明応 3 年 (1494)
79×20×2.5
3. 足立区
実性寺 金杉家墓地
延徳元年 (1489)
59×16.5×2
4. 川口市 正雲寺
寛正 5 年 (1464)
65×18×2.1
5. 川口市 早船一天家
文明 12 年 (1480)
51×15×2.0

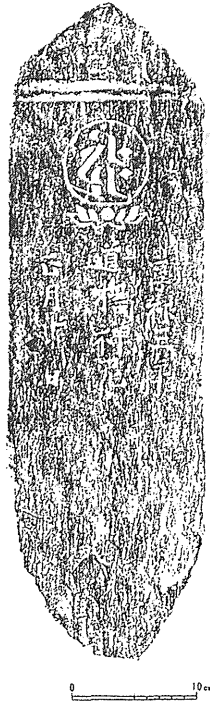
IR-5 類



1. 志水市 郷土資料館
永正 8 年 (1509)
69.5×21.2×2.0
2. 新座市 普光明寺
天文 23 年 (1554)
66×20×2.5
3. 練馬区 妙福寺
天文元年 (1532)
65×19
4. 東久留米市 多聞寺
延徳 2 年 (1490)
55×14.7×2
5. 東久留米市 大円寺
天文 11 年 (1542)
118×32.3×3

IR-6 類

第 22 図 倉田恵津子による板碑の分類 (2) (倉田 2012 より転載)



第23図 葛西城（青戸7丁目28番地点）
一号井戸出土板碑（小林1988より転載）

Ⅳ．おわりに

筑波大学所蔵板碑の所蔵経緯を記すとともに、資料紹介とその学問的位置づけを行った。

蓮座の型式分類から、文京区の板碑はイルマ川流域で確認される板碑群の仲間であることが明らかとなった。また梵字や蓮座などをさらに細かく検討することで、さらに細分化された流通経路復元が可能であることを示すことができた。

数少ない文京区の板碑がどのように生産され、運ばれ、利用されてきたか解明するには蓮座や梵字の分析だけにとどまらないだろう。例えば、板碑をどのように割り成形したのか、どのように花瓶や梵字を割付したのか、銘文がどのように配列されているのか、を解明することで、板碑の生産に関わる約束事や製作当時の歴史的な背景などに踏み込むことが可能であることは先行研究により明らかである。

本稿ではそこまで踏み込んだ論を展開することは叶わなかった。詳細なデータを提示することでその責に代えることにしたい。

謝辞

本稿は筑波大学所蔵板碑の経緯について記録を残すために執筆しました。経緯については元筑波大学教授岩崎卓也先生・西野元先生にご教示を賜り、付箋の解説にあたっては埜波真樹子氏の御助力を、また伊藤宏之氏・倉田恵津子氏・栗岡真理子氏・町田聡氏・常木晃先生・山澤学先生には板碑に関する貴重なご助言を頂きました。そして執筆にあたりましては滝沢誠先生にご指導をいただき、図面の製作にあたっては宮内優子氏・田代恵美氏にご協力いただきました。

末筆ながら御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

註

- 1) 筑波大学の所蔵遺物データベースによる。出土地は不明。「工事の際出土」と記録されている。
- 2) 東京教育大学は旧守山藩松平大学頭邸跡に建設されており、占春園はその庭園の名残である。板碑の造立していた場所は不明である。なお中世において当該地は居館であった可能性が指摘されている(伊藤 2010)
- 3) 判読不明の文字は□として表現する。
- 4) 但し三宅米吉教授、木代修一教授両者とも本資料群について記した論文などは見当たらなかった。三宅米吉教授、木代修一教授と本資料群との関わりについては、元筑波大学教授岩崎卓也先生よりご教示頂いた。また元筑波大学教授西野元先生によると1960年時点で既に東京教育大学の棟内に保管されていたとのことである。
- 5) 緑泥石片岩とは広域変成岩の一種で緑泥石を多く含む結晶片岩のことを指す。この岩石は熱と圧力を受けて生成されているため岩石内部に平行な面構造が発達している。したがって非常に剥離性を帯びており、ハンマーで叩くと薄く剥離状にはがれる(益富 1955)。板碑はこの性質を利用して作られている。
採石地の候補地として秩父郡長瀨町野上下郷と小川町下里が挙げられており(有元・村井 1987)、板石塔婆石材採取遺跡、小川町下里割谷など採石地の調査も行われている(池上 2001; 磯野・伊藤 2007; 小川町 1997; 坂詰 1990; 坂詰 1991; 三宅 2001; 渡邊 1997)。
- 6) 府中の板碑生産体制については深澤靖幸 1996 で詳細検討がされている。
- 7) ここでいうイルマ川とは、柴田徹によって流路復元された中世の入間川水系を指す。現在の入間川水系と区別するためにイルマ川と記している。アラ川、トネ川も同様である。中世の河川流路に関しては柴田徹 2008 を、板碑の流通経路復元については倉田恵津子 2008 を参照願いたい。
- 8) 板碑の生産過程について倉田は次のように述べている(倉田 2008)。「生産工程に関しては石材生産後の外形成形工程と種子・蓮座などの細工工程が分化し、外形成形後の半完成品集散の拠点となる二次供給地が出現し、ここを中心として板碑の形態や梵字種子・蓮座などの意匠に強い類似性ないしは共通性をもつ分布圏が主要河川の流域ごとに複数存在する」倉田が作成した板碑生産・流通モデルを第20図として挙げる。なお生産・流通モデルに関するさらに詳細な内容に関しては倉田恵津子 1995 を参照願いたい。

参考文献

- 池上 悟 2001 「板碑石材原産地周辺における調査」『立正大学文学部論叢』114 41-61頁。
- 伊藤宏之 2008 「隅田川流域の板碑」『板碑と中世びと』平成20年度地域史フォーラム・地域の歴史を求めて 42-50頁。
- 伊藤宏之 2011a 『筑波大学所蔵板碑集録』私家版。
- 伊藤宏之 2011b 「武蔵型板碑の生産と流通に関する一考察—浅草時における応永期の板碑を中心として—」『寺院史研究』13 1-27頁。
- 伊藤俊治ほか 2010 『大塚三丁目遺跡 第3地点』。
- 磯野治司・伊藤宏之 2007 「小川町割谷採集の板碑未成製品」『埼玉考古』42 85-101頁。
- 小川町 1997 『小川町の歴史』資料編3 古代・中世2。
- 荻原竜夫・西垣晴次 1967 『文京区史』1 481-501頁。
- 木代修一教授出版記念会 1961 『六十年のあゆみ 木代修一』。

- 朽津信明 2010 「板碑に見られる彩色について」『考古学ジャーナル』602 20-22 頁.
- 朽津信明 2011 「葛西城址出土板碑に認められる彩色の分析」『葛飾区郷土と天文の博物館紀要』12
61-65 頁
- 倉田恵津子 1995 「武蔵型板碑の生産と流通システム」『松戸市立博物館紀要』2 18-68 頁.
- 倉田恵津子 2008 「関東地方主要河川流路と武蔵型板碑の流通 2」『松戸市立博物館紀要』15 11-23 頁.
- 倉田恵津子 2012 「武蔵型板碑の生産および流通」『板碑研究の最前線』日本考古学協会 第 78 回総会
研究発表 39-57 頁.
- 小林千浪ほか 1988 『葛西城址 X』葛飾区青戸 7 丁目 28 番地地点発掘調査報告書.
- 坂詰秀一 1990 「板碑石材採掘地を訪ねて」『立正大学北埼玉地域研究センター年報』14 47-48 頁.
- 坂詰秀一 1991 「板碑石材採集地の調査」『立正大学北埼玉地域研究センター年報』15 38-42 頁.
- 柴田 徹 2008 「関東地方主要河川流路と武蔵型板碑の流通 1」『松戸市立博物館紀要』15 1-10 頁.
- 鈴木博雄 1978 『東京教育大学百年史』159-168 頁.
- 千々和實 1971 「板碑工作と中世商品的供給源の一考察」—秩父山麓一の未完成板碑群『上武大学論集』
3 [1987 『板碑源流考』に再録].
- 千々和實編 1979 『東京都板碑所在目録』(23 区分) 45-46 頁.
- 戸畑忠政 2002 第三刷 [1990 三刷 2002] 『文京のあゆみ』—その歴史と文化— 69-72 頁.
- 野中 仁 1997 「板碑に残る金」『埋文さいたま』27.
- 深澤靖幸 1996 「武蔵府中における板碑の型式と組成—14 世紀後半から 15 世紀前半を対象として—」『府
中市郷土の森紀要』9 23-45 頁.
- 文京区教育委員会 2005 「駒込富士前町遺跡 第 3 地点」『文京区文化財年報』.
- 益富壽之助 1955 6 刷 全改訂新版 [1955 全改訂新版 1987] 『原色岩石図鑑』117-121 頁.
- 松井和浩ほか 2008 『大塚遺跡』.
- 三宅宗譚 2001 「小川町下里で採取した青石の加工石材」『埼玉史談』47-4 6-18 頁.
- 渡邊美彦 1997 「埼玉県長瀬町野上下郷の採石場跡にある採石痕」—板碑の石材産地・加工に関する資
料紹介—『川崎文化財集録』33 67-73 頁.